

## 「手賀沼のヌマベを核とするまちづくり」

～「ヌマベ」が市民にとって水に親しむ空間となるように取り組んだら、どうなった？

日時：2021年10月23日（土）10：00～12：00

会場：我孫子市生涯学習センター アビスタ ホール 後援：公益法人山階鳥類研究所

### 開催趣旨

今、手賀沼フィッシングセンターとその周辺を拠点に、手賀沼の湖畔空間「ヌマベ」が市民にとって水に親しむ空間となるように変え、そこでさまざまな手賀沼の自然を楽しむイベントを公民学漁が連携し催しています。これは、柏市が手賀沼周辺の活性化を図るために推進している「手賀沼アグリビジネスパーク事業」の対象エリアの「水辺の拠点」に該当します。これらの地域活性化の取り組みについて紹介し、環境保全の視点を基本として、「ヌマベ」の活用を奥手賀と呼ぶフィッシングセンター周辺にとどまらず手賀沼流域全体に広げ、横の連携の可能性を探ります。

### 次第

10：00 実行委員長 中野 一字 挨拶、開催趣旨説明

10：10 (1) はじめに 報告 「柏市の農と手賀沼の水辺を活用する戦略とは？」

手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会 事務局 鈴木亮平さん

(2) 講演 「ひとつつながりの『ヌマベ』をデザインする」

東京大学 都市デザイン研究室 助教 永野真義さん

(3) 事例報告 「子どもの遊びが流域をつなぐ」

手賀沼まんだら（ヌマベクラブ） 渡辺玲衣さん

11：40 意見交換

12：00 閉会

### 講師プロフィール

#### ■ 永野 真義 さん

1986年大阪府生まれ。東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻修了。2011年4月より株式会社日本設計 建築設計群にて勤務。都市建築の設計・リノベーションに従事。2016年8月より東京大学大学院都市デザイン研究室助教。同9月より手賀沼水辺の拠点整備事業（手賀沼フィッシングセンター外構改修）の基本デザインを担当。

#### ■ 鈴木 亮平 さん

1986年東京都生まれ。2011年東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻修了。大学院在学中に行った設計演習をきっかけにballoonを結成し、2012年に法人化。都市計画・まちづくりのコンサルタントとして、少子高齢化・人口減少が進む中で、社会の縮小を前提とした豊かなまちづくりを目指して、全国各地でプロジェクトを展開中。

#### ■ 渡辺 玲衣 さん

愛知県出身。千葉大学大学院自然科学研究科修士課程修了。企業勤務を経て、環境NPOに就職。小中学校や行政と連携し地域環境教育プログラムの企画・実施、過疎地に企業のCSR事業を呼び込む企画の開発・運営。第2子出産後は2歳から18歳までの児童発達支援。保育士、初級ABAセラピスト。仲間と手賀沼流域での子育てを「手賀沼まんだら」と名付けて実践中。

## 報告「柏市の農と手賀沼の水辺を活用する戦略とは？」

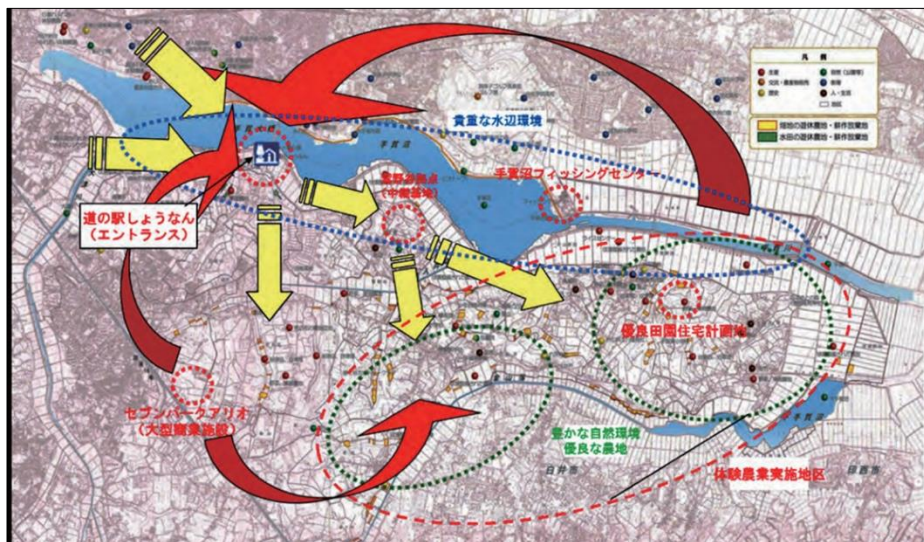
手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会 事務局 鈴木亮平 さん



## 手賀沼アグリビジネスパーク事業とは

手賀沼アグリビジネスパーク事業は、旧沼南町の頃から検討されてきて、柏市と合併後平成22年に柏市が策定したしょうなん地域整備方針の中で「農業や観光・レクリエーションの振興による環境共生・

交流の地域づくり」としてスタートしました。図にあるように、例えば道の駅しょうなんをエントランスとしてデザインする、東側では体験農業実施エリアとして整備する、また、貴重な水辺環境を守りながら活動していくということも構想しています。拠点整備等の事業を推進するため、平成28年に手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会が発



足しました。道の駅しょうなん・地元農家さん・事業者等で構成し、柏市農政課が管轄しています。

この構想の背景として、しょうなん地域の現状・課題があります。人口減少・高齢化・後継者不足による農家の減少によって「コミュニティの担い手」が不足し、祭りや草刈りが困難になり、耕作放棄地などの増加にもつながり、大切な自然・景観や歴史・文化の継承が課題となっています。柏市の財産を守る取り組みです。取り組みの指針は、農と市民の関係性の構築を探り、「農」という営みを守っていくこと。「手賀沼を市民が憩える身近な場所に」をスローガンに、以下に取り組んでいます。

- 手賀沼の自然・歴史・文化にふれる体験・時間の提供
- 体験プログラムによる環境の美化・向上
- 来訪者の「楽しい」を、地域に必要な「労力」に
- 体験プログラムによる収益を環境整備・地域活動へ
- 広く市民に知ってもらい、みんなで継承できる道を

## 拠点の整備

令和3年12月道の駅しょうなんがリニューアルオープンします。地産地消の推進による農業振興の核とし、手賀沼の玄関口として、行事体験や地域の情報発信を推進します。

手賀沼フィッシングセンターは、第2の拠点として、手賀沼全体に回遊性を促すことを目指し、平成29年から再整備をしてきました。そこをフィールドに活動している団体で「ヌマベクラブ」を立ち上げ、意見交換し多様な企画を開催しています。



## 体験プログラムの開発

体験プログラムの企画・開発は、農家さんと連携して耕作放棄地を活用し、市民参加や農と福祉の連携を検討しています。さらにワイン用ぶどうなど新規農産物のチャレンジ、ひまわり油などの体験を織り交ぜ販路の模索をしています。これも手賀沼のファンを作ることに繋げる活動です。

手賀沼の自然環境への理解を深める体験として、フィッシングセンターで、今日の発表者の渡辺さんが毎月生きもの観察会をしています。また、荒れた竹林の手入れをしながら、竹を利用したのキャンプ、SUPやカヌー、水辺のゴミ拾いをし、拾ったゴミでアート制作することで、今の手賀沼を肌で感じることができます。今後、観光庁の補助金による小中学校向けの体験プログラム「手賀沼スクールヤード」や、環境教育と食育を合わせたプログラムを開発し、将来の担い手・市民消費者の育成をしていきます。



## 情報発信



手賀沼の魅力を伝え、活動を可視化するため、積極的に情報発信しています。

## 「農」から始まり、「まち」へ「流域」へ

これまで5年間取り組んできた中で、新たな気づきがありました。一つは、手賀沼に関わる多様な視点です。農業や環境の視点はもとより、福祉分野で地域と協働を展開する場、子ども達がのびのびと自然にふれ合って遊べる環境、健康づくりのために大勢の方々が利用する環境、歴史・史跡・守り育ててきた文化など、多様な視点で住民や市民団体や事業者の多様な取り組みが盛んであること自体が手賀沼の魅力であり、これらを一層生かすことが重要と思います。

二つめは、行政界を超えた手賀沼流域としての視点です。沼・水辺・田畑・斜面林を一体的に捉えた環境の魅力を守るには流域の視点が必要と思います。

三つ目はグリーンツーリズムという価値です。コロナ禍で大変な状況ですが、むしろ手賀沼の価値が見直されていて、新たな展開ができると感じています。

## 新たな推進体制へ

見えてきた幅広い視点による取り組みを展開するため、流域各自治体と連携できる柔軟な組織が必要と考えています。将来的には、テーマごとの部会（体験/遊休農地/加工品開発/水辺/移住・定住etc）を作り、プロジェクトごとの予算獲得ができたらと思います。地元事業者、市民団体の積極的な参画により、議論・検討・交流・協働の場を作っていきたい。ヌマベクラブの取り組みから、多様な価値観の団体と一っしょに活動する（協働する）意義を学びました。協議会の活動も成長していきたいと思っています。

## 講演 「ひとつながりのヌマベをデザインする」

東京大学大学院工学系研究科 都市デザイン研究室 永野真義 さん



永野さんは「2021年度グッドデザイン賞」を受賞されました。

東京の上野・湯島の歓楽街「仲町通り」で、街灯を立飲みテーブルに変えるアイデア。日が暮れ始めると商店主達が街灯に着脱式のテーブルを設置して回り、通りに点在的な滞留空間を生み出す。来街者は界隈の飲食店からテイクアウトの飲食を各々選んで持ち寄り、街角で話に花を咲かせる。(東京大学都市デザイン研究室 HP より)



永野さんが大切にされている「人と人をつなぐ」デザインが解かると、司会者よりお知らせしました。

## 池田武邦さんと C.W.ニコルさん

私はかつて建築事務所に勤め、都市の大きなビル開発に携わっていました。そんな私がなぜ手賀沼に関わるようになったのかを、まずお話しします。

写真の真ん中にいらっしゃるの池田武邦さんです。日本初の超高層霞が関ビルの設計チーフをされ、その後も多くの超高層ビル建築に関わった建築家です。池田さんは「超高層ビルを造る真の目的は広場を造ること、手段と目的を間違えてはいけない」と言われ、高層ビルの足元に武蔵野の森をつくりだされました。しかし、50階にある仕事場から下に降りて来たら雪が降っていて、「50階の雲の上で仕事をしている自分は、自然の感性を失くしている」と自らの仕事を省み、自然に対する感性を取り戻す建築に取り組みました。そして、オランダ村やハウステンボスなどを設計し、長崎県大村湾に終の棲家として、ほぼすべて地産の材だけを用いた“土に還る”建築である「邦久庵」を建てられました。私はこの「邦久庵」の保存の取り組みを立ち上げたことで、池田武邦さんにお会いすることができました。大村湾がコンクリート護岸に替えられていくなか、「水際は臉のように繊細な場所」で、絶対を守るべきだと主張されたことで、今も大村湾沿いの重要な所は自然護岸が保たれています。

C.W.ニコルさんは池田さんと自然に対する価値観が同じで、「邦久庵」の保存活動を進める中でお会いし、「海と森はつながっている」ことを教えていただきました。ニコルさんは1986年から黒姫高原のアファンの森で生きものが戻ってくるよう活動されています。そこで教えていただいたことは「生きものの声を聞きながらやりなさい」ということです。少しずつ森を整備し、どうなったかを検証し、次の年に活かす、長い時間をかける、最終的には千年かかると。また、「自然欠乏症候群」という言葉と「都市生活者に自然を提供する」ということを覚えておきなさいという教えを授かりました。自然とのふれあいが少ない子どもたちは、集中力が無くなるなど精神的な問題が起こりやすくなると言われています。英国ナショナルトラストの「自然欠乏症候群にならないために、12歳までに

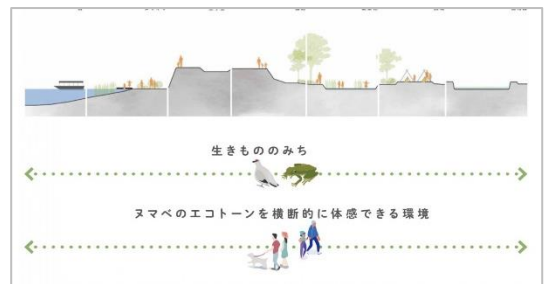


しておくべき50のこと」には「大きい丘を転がり落ちる」とか「網で魚を捕まえる」などが挙げられています。手賀沼湖畔で活動されている皆様は当たり前のことと思われるかもしれませんが、まさに手賀沼湖畔は自然欠乏症候群にならないための絶好の場所なのです。

そうしたことを池田さんとニコルさんから教えていただきながら研究をしてきました。そんな中で、手賀沼フィッシングセンターの再生デザインへの協力のお話をいただきました。

## 手賀沼フィッシングセンターの再生

手賀沼周辺を広域で見ると柏市を中心に市街地が広がっていて、都市部に住む人が20分で行ける豊かな自然があり、都心まで30分で行ける、コロナ禍で注目されているマイクロツーリズムとしても強みのある地域だと感じました。これはフィッシングセンターの俯瞰写真です。沼、川、水路、田んぼと水辺に溢れたロケーションです。さらに周辺には広い水辺があり、水際、丘、田んぼ、その奥の谷津まで、エコトーンを横断的に体験できる環境です。池田さんとニコルさんの教えを振り返れば、「ヌマベは人と沼の接点」であり、環境を肌で感じるパブリックスペースとしてフィッシングセンターを再生できると思いました。



## 再生コンセプト

フィッシングセンターは全体で約4万㎡あり、そのうち柏市の借地部分を公共空間として整備するため、東大都市デザイン研究室にデザインの依頼がありました。

それまでのフィッシングセンターは“たまり”の様相でした。いろいろなアクティビティがあってもバラバラで、すぐそばにあるのに手賀沼が感じられない、植栽で隠されているような施設でした。それを手賀沼につなげ、プログラム同士もつながった“わんど”のような場にすることを提案しました。

“わんど”に学んだ7つのデザイン作法があります。①境界があいまいで、自然と流れ込むような出入口のかたち、②行き止りがなく、常に流れ続けられる、③多様な水際線をつくる、④完結しない生態系のようにいろんな居場所を行き来できる、⑤人工物を活かし自然となじませる、⑥ちいさな地形や高低差を活かす、⑦木々や地形で囲うことによる落ち着き。これらの作法に基づいて再生していくことを、一番最初に提案しました。

境界の植栽を整理し活動を見せ、高低差を利用して階段も遊べて小さな冒険ができるように、使っていない生け簀をつなげて、水面が見える柵のないハマれる観察池を造りました。昨年には、子ども達が「ミライいのち池」と名付けて、看板を立てました。柏市は看板を立てたり、石を並べるなど由な活動をご支援くださって、パブリック



スペースの活用まで自分たちで実践しています。みんなでいっしょに作り育てるミライいのち池です。

## 整備もイベントも段階的に

フィッシングセンターのハード整備は、予算の関係もあり2016年から2020年にかけて段階的なものとなりました。毎年ちょっと整備してはイベントをやり、またちょっと整備してはイベントをやるということを繰り返しました。施工業者が変わるとなかなかデザインが揃わないというようなデメリットと考えることもありましたが、地元の方々や漁協さんとの意見交換を重ねられたという意味で、結果圧倒的にメリットが大きかったと思います。一気に変えないことの効果がありました。

手賀沼とつながるためには、空間的工夫はもちろん、手賀沼に開かれた使い方を促す仕掛けをつくらなければなりません。そのため設計だけでなくアクションも継続的に行ってきました。第1段階の整備が終わった2018年には「テガヌマウィークエンドVOL.1『ヌマベザシキ』」を実施しました。ウッドデッキを湖畔に置き、ぎりぎりまで下りてきてもらう、景色が変わる体験をしてもらいました。この時初めてカタカナの「ヌマベ」を使い、いい意味で引っ掛かって貰えたのではないかと思います。2019年にはフィッシングセンターから湖畔まで一体的に感じられるように、ヌマベで10個のプログラムを実施し、2日間で700人ほどが来てくれました。「the Power of 10」の法則というのがある、1つの場所で10種類の活動があると、人は多様性を感じ、居心地よく思えると言われています。



## ヌマベを求める人々、ヌマベの使い手

イベントをした時は必ずアンケートをとりました。その結果はおもしろく、大事で、意外でもありました。「ヌマベの環境管理に参加したい」人が60%近く、「主体的に参加したい」人が20%いました。こんなに参加したい・使いたい人たちがいることに大きな可能性を感じました。こうした人たちが集う情報交換から始めました。段階的に進め、2020年秋のテガヌマウィークエンドでは、「ヌマベクラブ」というチームを作る実験として企画運営からやってみませんかと呼びかけ、10の団体が19のイベントを実施し、翌年4月から正式にヌマベクラブとして発足しました。

いまヌマベクラブには、SUPやカヌーをやっている団体、手賀沼水生物研究会、ふれあい緑道の管理をしている新松戸造園、最近カフェの人達も参加しました。かなり巾のある人たちが、一つのプラットフォームの中で多角的に議論し手賀沼に関わっています。

ヌマベクラブは6つの活動のコンセプトがあります。

①活動をシェアしよう、②手賀沼を学び合おう、③身軽に（簡単にぱっとできるように）しよう、④環境を整えよう、⑤新しいことを発見しよう、⑥未来を描こう、です。日常的にフィッシングセンターに人が訪れ、日常的に手賀沼を体感している状況にしよう、渡辺さんによる月1回の観察会、漁協の納涼祭り、ワークショップ用スペース作り、環境保全の学習会、団体同士のコラボ企画を実施しています。「未来を描こう」については今のところ東大の学生から「20年・30年後のフィッシングセ



ヌマベクラブメンバー  
2021.10現在

1. 手賀沼まんだら
2. てがぬまバドルクラブ
3. 柏カヌークラブ
4. VIVITA家老
5. GPカヌーフェーズム
6. 手賀沼水生物研究会
7. (株)新松戸造園
8. 手賀沼漁業協同組合
9. WOODMAN'S VILLAGE
10. 奥手賀フェーズム
11. 東大都市デザイン研

事務局・手賀沼アグリビジネスパーク  
事業推進協議会

ンター」を提案し議論しています。議論して自分たちの環境を自分たちで整えていくことが大事です。「デザイン、整備、アクション、データによる考察」を繰り返し、それを議論して、ビジョンを更新していくという姿勢でやってきました。

## 水辺を活かしたまちづくり

次に「水辺を活かしたまちづくり」についてお話しします。フィッシングセンターもその一つですが、この10年くらい全国的なブームとなっています。2009年「かわまちづくり支援制度」ができて、いまでは200を超える自治体が「かわまちづくり計画」を策定しています。これまで背を向け合いがちだった「川」と「まち」が向き合うよう、空間的に融合するように整えるための計画を、国交省から「流域が連携して提案する」よう呼び掛けて、提案がよければ認定して補助金を出すという制度です。例えば印旛沼は2015年に5市町村で道の駅・一里塚・水運を整備しています。

さらに、2011年の「河川空間水辺のオープン化制度」は、条件を満たせば民間の営利業者も河川敷地の一部を占有できるというもので、新松戸駅近くの新坂川では、デッキを作り地元の事業者が使っています。2013年の「河川協力団体登録制度」は自発的に河川の管理や維持に協力してくれるNPOや団体を支援する制度で、草刈り等の管理を委嘱するものです。千葉県は佐原の川の駅のガイドのみです。

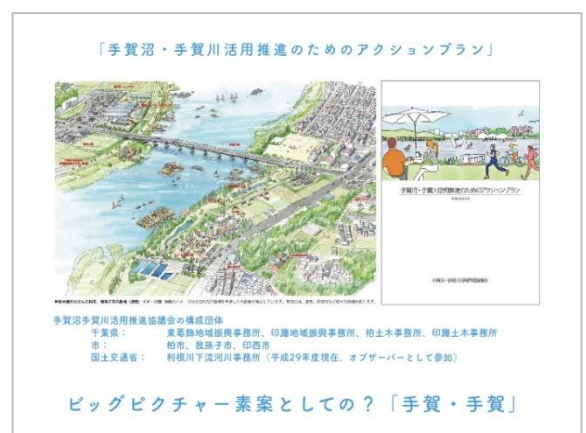
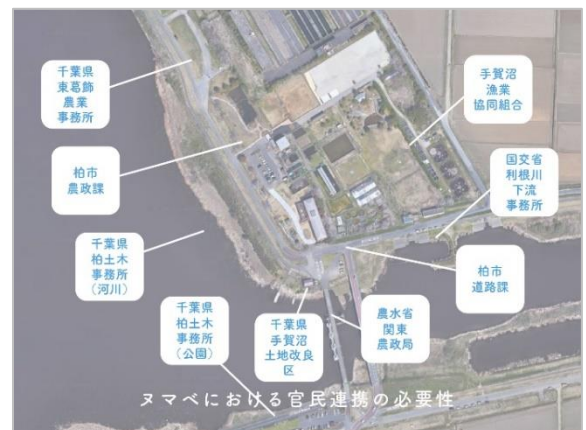
2014年からの「ミズベリング」は行政の境を超えて官民一体となって水辺を活かして楽しみましょうというムーブメントのようなものです。川単位あるいはまち単位で全国30か所、千葉県は花見川で行われています。敷地境界や管理境界を越えてデザインしていこうという取り組みが進んでいます。

フィッシングセンター周りでも管理境界や敷地境界を越えて協力することは大事と感じています。この図のように、ヌマベは目に見えないところで線を引かれていて、アクティビティをする時はそれぞれに多くの許可を得る必要があります。しかし、たくさんの行政機関との話し合いで今後改良ができたり、横展開へつながることもあると思っています。

手賀沼でも「手賀沼・手賀川活用推進協議会」が「手賀沼・手賀川活用推進のためのアクションプラン」を策定しています。これは柏市・我孫子市・印西市と県・国交省も参加してつくられたものと聞いています。今後、先にお話ししたムーブメントの中で議論していくことになるのでしょうか。これからこういうことも考えていく必要があります。

## 「路上の parasol」と「ビッグピクチャー」

まちづくりで大事なことは2方向あって、一つは「足元を掘りさげる」こと、「安く簡単に最小限に」できることをやってみることで、もう一つは「未来を描く／流域として描く」こと、将来的に長く時間がかかるプロジェクトを構想することです。前者を「路上のpara



ソル」、後者を「ビッグピクチャー」と言っています。私達はフィッシングセンターで「路上のパラソル」を置き続ける、それからビッグピクチャーとしての例えば自然護岸化など、両方やるのが大事です。協議会が進めようとしている「まちづくりセンター構想」も「ビッグピクチャー」をつくることです。

ヌマベクラブの活動はただ置くだけではダメで、いわゆるPDCAが大事です。アイデアを立てて、行動に移してちょっとしたデータを取って少し来年を良くする、それを回し続ける。ヌマベクラブは運動体だからであり、それは、皆さんの活動の多くにも当てはまることだと思います。

### ひらがなのまちづくり

ひらがな書きの「まちづくり」は1980年頃から使われてきました。それまで街づくりのイメージがトップダウン的な「開発」だったことに対抗して生まれました。「まち」とは「地域に住む人々が、自分たちの生活を支え、快適に、より人間らしく生活してゆくための共同の場」であります。「目に見える広場や美しい街並み、水路や街路などの施設はもちろん、地域に住む人々が守っていけるルールや意識も、見えない共同の場」です。見えない共同の場をいっしょに考えていくこともまちづくりです。「まちづくり」には、「新しくつくるだけでなく、風土と歴史の上に立って修復したり、守ることも含まれる。つまり逆に『つukらないこと』、『つukらせない』ことも含まれる」のです。全国のかわまちづくり計画に出て来るキーワードの分析をみると **Redevelopment** (つくりかえる) に関するワードが多いと感じます。**Rehabilitation** (修復する) と **Conservation** (守る) をいかに取り入れてバランスしていくか、これは「かわまちづくり」そのものの課題です。手賀沼で「かわまちづくり」や「ミズベリング」に取り組む際には、この3つのバランスをみんなで議論しながら進めていくことが大事です。手賀沼は、27年間水質汚濁ワーストワン、放射能の問題、北千葉導水による環境の変化、外来生物の問題を抱える中、地元の皆様の活動がとても盛んで環境先進地、ポテンシャルのあるところだと思います。手賀沼から「ヌマベリング(手賀沼型のミズベリング)」「こういうバランスの取り方がある」と発信していけるような取り組みにしていきたい。私も路上のパラソルを置きながら皆様方といっしょに議論ができたと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。



まちづくりとは?  
田村明『まちづくりの思想』(1987)を参考として

「まち」とは

地域に住む人々が、自分たちの生活を支え、快適に、より人間らしく生活してゆくための共同の場。  
目に見える広場や美しい町並み、水路や街路などの施設はもちろん、地域に住む人々が守ってゆけるルールや意識も、見えない共同の場である。

ヌマらしさを尊重したミズベリング = 『ヌマベリング』へ

- より「横断的」に使いこなしていく  
水面から台地までのエコトーン体験は沼の財産です。
- より流域市民が主体的に関わる  
流域の生活の影響が現れやすいのが沼の特徴です。
- より「ハビタット・生息環境」を尊重する  
人間あらゆる生きものうちのひとつと捉えます。
- 「なりわい」と結びつけて活動する  
生業を支え、文化を育んできた歴史をつなぎます。
- 使うことを目的化せず「守るために使う」  
目的と手段を間違えないことで持続性を保ちます。

生きもの  
エコロジカル  
体験  
エコトーン  
漁業・農業  
市民活動  
自分たちで  
歴史  
環境問題  
入り込みやすさ  
目的と手段を間違えないことで持続性を保ちます。



## 事例報告 「子どもの遊びが流域をつなぐ」

手賀沼まんだら（ヌマベクラブ） 渡辺玲衣 さん



## 自分のこと、遊びとは

私は「手賀沼まんだら」（以下まんだら）の代表ではなくもっぱらコンセプトをつくる役目です。仕事として霞ヶ浦のアサザ基金のスタッフを8年間やり、社会に対する問題意識をこんな風に昇華・表現すれば、社会に役立つことを学びました。子どもが2人生まれ、児童発達支援に進み、今は応用行動分析学を活用した自閉症の子ども達の療育をしています。

今日のお題で、なぜ「子どもの遊びが流域をつなぐ」という疑問をお持ちになったかと思えます。

「遊び」について少し調べてみました。遊びとは、「自分から」「満足するまでやる」「楽しいというご褒美がもらえるのでまたやる」「遊びを通していろんな能力を獲得していく」とありました。とても大事なこと

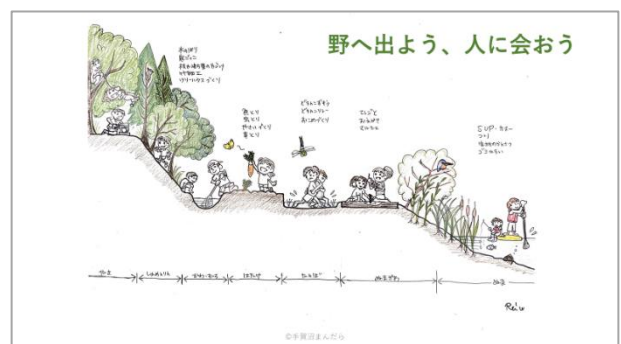
で、親として「主体的に、自発的に身近な環境に関わる」力を持ってくれたらいいなと思いました。遊びの重要性は、「心身の発達に欠かせない、食事・睡眠・排泄と同じように必要なもの」とあります。遊びの効果は「脳や体を発達させる（社会性、判断力、コミュニケーション能力を育てる）、創造性や柔軟性が育つ、自発性が育つ」です。子どもの権利条約では子どもは遊ぶ権利があると書かれているそうです。「遊びって大事、遊ばせたい」と思いました。

次のスライドは私のことです。人との関わり・環境との関わり・遊び方を整理してみました。私が育ったのは団地で、小さい頃は公園に集まっているいろんな学年の子たちといっしょに外遊びをしていました。でもファミコンが魅力的過ぎて、クラスの子だけと約束して部屋の中で遊ぶようになりました。子どもを持ってからは、放射能が降り注いだ時だったので外遊びがためらわれ、そもそも皆習い事や塾で時間も無く、週末にはショッピングセンターにでも行こうかと、まんだらの人達もほぼ同じような状況でした。コロナ禍になってからはさらに大変になりました。

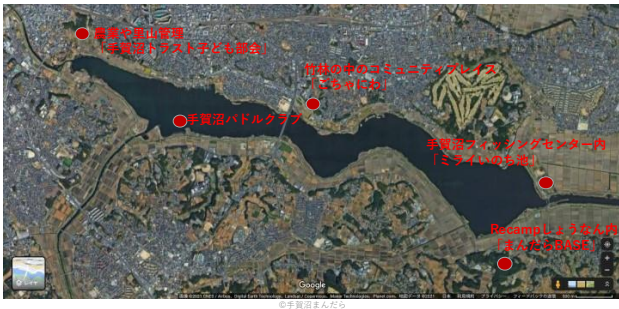
福祉の仕事をしている仲間と「困りごとを抱えていてもたすけあえるコミュニティが無い、一人で頑張らないといけない、それって手賀沼に似ているね」という話をしました。景色を見る人はいるけれど、主体的に関わる人がいない、生業としての関りも無いし、暮らしに必要な事も無いから。

そのような問題意識があって、子どもに関わる人を多様にしようと思いました。自分の子は褒められないけど他人の子は褒められるとか、子どもも自分の親の話は聞けないけど、他の子の親の言うことならおもしろく聞けるとか、例えば家事がわからない時に、家庭だけで解決しようと思うと負のスパイラルなんだけど、隣の人にちょっと手伝ってもらえると解決できます。

主役の子どもたちが歩いて行けるところはどこだろう。私たちは手賀沼に恵まれている！と、スタートしました。今、手賀沼から斜面林の台地の上まで使って活動しています。まんだらは、プロジェクトチームのように、やりたいことがあれば集まって助成金をもらって活動しています。



こどもの遊びが流域をつなぐ



私たちは、元気な子ども達を自由に遊ばせてくれるところを探して、最初はNPO 法人手賀沼トラスト（以下トラスト）に「子ども部会をつくらせてもらって、田んぼや畑の作業をやらせていただきたいと頼み込みました。SUP（サップ）は遠くまで出かけてやっていました。手賀沼はきたないんじゃないかと心配するお母さんもいたのですが、子ども達はやりたい、気持ちがいいからと言います。ゴミアートも、こんなのが作れると教えられると、ゴミが拾いたくなるんです。こんなカッコいい竜ができあがりました。



「ヌマベ」では、トラストで教えてもらって作った竹細工を売ったり、まんだらの子どもたちが、参加したお子さんに作り方を教えたりする場になっています。

「ミライいのち池」では、生きものの視点で環境を見直して手を入れていく、自分が主体的に関わったことで手賀沼が良くなった、池が良くなったという体験をすることで、大きくなって手賀沼を良くしてくれる人材になると思っています。



「谷津」も生きも生きものの道だよって遡ってみたりしています。実際にミライいのち池と同じ生きものもいて、池だけでなく周辺の環境にも目を向けられるようにしています。

ここは「トラストの田んぼや畑」です。農業体験をやりたがる子はいないのですが、友達がいっしょだと、みんながいっしょだからやろうと主体的に動いてくれるようになります。もちろん子どもだけでも、研究者の様に何時間も土をこねている子もいて、そういう時間も大事だと思っています。



まんだらのコミュニティプレイス「ごちゃにわ」です。ここは放課後に子どもたちがやってきて自分が思いついたことをやる場所です。ここではひらめいたことは何でもやっていい場所です。もともとは耕作放棄地で、お父さんお母さんたちが、竹を切って下草を刈って広げた上で遊んでもらっています。竹も好きに切って使っていいし、流しそうめんも、竹を切り出すところからやりました。ビオトープも作っています。



「トラストの雑木林」も、いつも、遊びたいからお手入れするという感じでやっています。お手入れしつつ見つけた生きものは毎年地図にして最後に発表しています。子どもはお宝を見つける天才です。先日大人も知らなかった「夜に光るヤスデ」を発見しました。千葉県の高貴種だそうで、落ち葉の下から見つけてくれました。「Recamp しようなん」さんとの協働事業は、手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会に仲介をいただいて始まりました。近くの竹林を整備し、その竹材を使って自分達だけのキャンプギアを作る、というワークショップを企画提供しています。



仲間にデザインが得意な方がいて、活動するときのTシャツを作っています。「ザリガニ食べたいから放さないぞ」「かंगाえるな 感じる」「ヌマベクラブ」など、「手賀沼に主体的に関わっている大人はカッコいいぞ!」と見せる、ファッションブルに活動していきたいと思っています。

## 意見交換

**Q** ザリガニを食べているんですか、調理が難しそうですね。

**渡辺** アメリカザリガニです。5分以上ゆでて、背ワタを抜けば美味しく食べられます。ペペロンチーノ、フライ、焼いても美味しいです。アメザリは特定外来生物になると言われていて、ほっとくとザリガニだけになってしまうし水草も切っちゃうし、駆除するにも楽しいことが無いといけないし、子ども達にも説明ができないし「放したのは人間だからごめんねって言って食べよう」と言って食べています。ウシガエル、アカミミガメも食べています。

**Q** 沼周辺の農地は後継者がいなくて荒廃が進んでいます。一方少年野球のグラウンドが無くて困っています。農地の転用は禁じられているのですが、水辺で活動できるような使い方はないでしょうか。

**鈴木** 農地なので貸し借りは難しいです。農家さんも所有する事自体が苦しくなっています。そこに、こんな風に使わせて貰えないですかと提案する、グリーンインフラという新しい価値を考えていくことが大事だと思います。

**Q** 我孫子に住んでいます。手賀沼がこの5~10年でこんなにおしゃれになったことに感銘を受けています。イベントをやって集まって来る方と地元の方々とどのようにつながっていけるのかなと思います。

**永野** フィッシングセンターに関しては、漁協さんという最も土着的な方々が管理しています。イベントの時に生業としてやって来られた方々に、先生役になっていただくことから始めたい。また、民芸や文学の歴史などをどんどん教えていただくというスタンスで関わらせていただきたい。

**鈴木** まちづくりは、今住んでいる人が暮らしや環境を良くしていくことが大事です。そこに新たな人達が入ることで、元々住んでいた人が気付くこともあります。そこをつながけながら理解し合いながら新たなステップを踏めるとよいと思います。

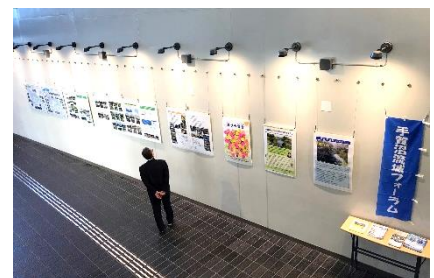
**渡辺** まんだらも新しく住んだ人と、子どもの頃から住んでいる人がいます。SUPをやる時に「手賀沼入れるよ」って言ったら、「あんなに汚かったんだから入っちゃダメでしょ」と抵抗するママもいました。よその人の方が良いところを見つけやすい面はあるかと思いますが、これまで培ってきたものも大事にしていきたい。トラストの理事長の手賀沼を大事に思う気持ちを引き継いでいきたい。「関わらないとすぐ宅地になっちゃうよ」って言いながら活動しています。

**Q** 手賀沼流域のDMO（観光庁が推進する「観光地域づくり法人」）に興味があります。協議会としての今後の取り組みを教えてください。

**鈴木** 協議会の設立当初からDMOを推進する検討をしてきましたが、今のところDMO自体をつくることは考えていません。先程お話しした「まちづくりセンター」のように、様々な個々の活動を尊重し、つながり合いながら、魅力ある手賀沼をつくっていききたいと思います。



【講演会当日は会場で、10月18日~21日アビスタストリートで、活動をパネル展示】



## アンケート から

居住地	柏市	12
	我孫子市	18
	流山市	3
	松戸市	2
	世田谷区、千葉市 土浦市、市川市	4

年代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上	不明
人数	2名	4名	6名	6名	16名	4名	3名

## 1) 鈴木亮平さんの報告『農業振興』から『まちづくり』へは、いかがでしたか

- 農業の厳しい現状をひまえ、農業自体の振興だけではなく、多角的な面から活動する戦略が興味深い。
- 自治体・地元事業者・住民等巻き込みながら、積極的な活動を進めており、特に子供を楽しませながら環境を考えさせる等、素晴らしいと思います。
- 地元出身でないからこそ、新鮮な視点で、沼南でプロジェクトを数々立ち上げてこられて、敬意を表します。我孫子の住民として1974年から手賀沼と浄化運動の視点で関わってきました。永野氏の「ヌマベリング」に仲間入りしたいものです。
- 子どもから老人まで、人の集う手賀沼であつたらよいなという思いを強くしました。
- 我孫子他市町村の連携の必要性、重要性和難しさを感じるが今後の活動を期待しています。

## 2) 永野真義さんの講演「ひとつながりの『ヌマベ』をデザインする」は、いかがでしたか

- 非常に勉強になった。ニコルさんや池田先生から受け継ぐ“哲学”を、研究や活動の中で、これからは形にしてもらうことに期待したい。今後の発信を期待したい。私も自分の分野で連携をとってみたい。
- よくわからなかった「ヌマベのデザイン」の心がわかってほっとしました。「つくる」の意味に3つあること、私たちの求めていることと一致することに、これから先一緒に活動できると思いました。
- 手賀沼があることが好きで我孫子に越してきた人間です。しかし、一番水質が悪い時期でした。そこでせっけん運動を起こしました。フィッシングセンターにしばらく行っていませんでした。こんな形で生かして下さっている方達のお話で、感激して聞きました。感謝。
- 「フィッシングセンター」の漁業組合長は我孫子出身の方でした。1970年代からの手賀沼の汚染で漁業の低迷もあり、我孫子市民はフィッシングセンターのことを遠くに感じていました。「ヌマベ」デザインでよみがえらせた永野さんに感謝です。我孫子はこれまで「修復」「保全」の視点でまちづくりをしてきたと思いますが、しっかり「ヌマベリング」を組み入れさせてほしいと思います。

## 3) 渡辺玲衣さんの報告「子どもの遊びが流域をつなぐ」は、いかがでしたか

- ご自身の経験や感じていることを中心に、わかりやすく手の届くところからはじめてるので、とても親近感を感じました。こうしたつながりや活動が数多く出てきたらと感じました。
- 新しい手賀沼周辺の復活を「子どもの遊び」に、いち早く「つなぐ」活動に敬意を表します。
- 子育て「遊び」と自然の関係性の話にまずひかれた。長年の障がい児との関わりや4人の子育ての経験からもつくづく思う。
- 子どもたちを自然で遊ばせることで、座学では学べないことが多く学べると思った。当たり前にあつて気付かない自然から育む心・身体はとても大事。